様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ９ 月 ３０ 日現在

機関番号：３２４１１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３５０３４９

研究課題名（和文）映像メディアの教育課題向上に関する研究

研究課題名（英文）Effective Usage of Visual Media in Education

研究代表者
塚本　美恵子（Tsukamoto, Mieko）

駿河台大学・人文社会・教育科学系・教授

研究者番号：１０２７５９２７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,800,000円

研究成果の概要（和文）：映像は教育効果を上げるメディアとして注目されているが、映像を視聴したアメリカの児童の約４割が文化の影響をうけたイメージを記憶していることが調査から明らかになった。本研究では、①日本で育つ「外国につながる子どもたち」にも映像記憶に文化の影響が見られるのか、②育つ場の文化が影響を及ぼすのか、③発達段階により変化するのか、を日本の南米系外国人学校、ブラジルとペルーの日系学校、ペルーのインターナショナルスクール校、カリフォルニアの小学校と高校、さらに日本の小学校での調査から明らかにした。
　研究成果は現段階で、①は影響が若干みられ、②は有意差が確認され、③は有意な変化は認められなかった。

研究成果の概要（英文）：Visual media has been found to be an effective education tool.
This study reports on the results of an audio-visual survey conducted at Brazilian schools and a South American school in Japan, Japanese schools in Brazil and Peru, an American-British Style School in Peru, an elementary school in the USA, a high school in the USA, and a Japanese public school. This comparative research focused on the following three main areas; the relationship between culture and image, the cultural influences of place on children's perceptions, and the influence of culture on children's development. It was found that there was a slightly significant influence of culture on children's image interpretation and that culture significantly affected children's perceptions. However, cultural influences were not found to be significant at particular developmental stages.

研究分野：異文化間教育

キーワード：映像記憶　文化の影響　外国につながる子どもたち　視聴調査　南米

１．研究開始当初の背景

本格的な英語学習経験のない子どもたちが、英語版のアニメーション視聴時に英語のナレーションをそのまま反復（Mimic）し、言語が理解できなくてもかなりの集中度で映像を見て内容を理解していた。そこで平成22-24 年度の科研研究「映像メディアによる教育課題向上に関する研究」では、日米で映像理解に関する調査研究を行った。日本での調査後、アメリカの３つの言語環境が異なる小学校（Ａ校：日英バイリンガル校、Ｂ校：スペイン語英語のイマ －ジョン校、Ｃ校：私立小学校）での調査結果から以下の点が明らかになった。

(1)日米の子どもたちは言葉がわからなくても 60%以上の注視度で映像を視聴
(2)注視度の低いシーンは日米で同じようなパターンを示した
(3)子どもたちのお気に入りのシーンは学校毎に異なっていた
(4)アメリカの子どもたちは物語の鍵となる雪だるまを２玉ではなく３玉で描く者がいた
(5)上記３校での再調査から小学校４年生 101 名で実施したところ約４割が雪だるまを３玉で描いた
(6)３玉の雪だるまを描いた児童はＡ校で 25%、Ｂ校で 39%、Ｃ校で 47%と学校により差があった
(7)Ｃ校の４年生と５年生では３玉の雪だるまを描く４年生の数が有意に多かったことから発達段階による違いも示唆された
(8)繰り返しの視聴調査の結果から、映像メディアを見たままの２玉の雪だるまを記憶・再構築して描くのではなく、文化の影響を受けた３玉の雪だるまを描くことが明らかになった

２．研究の目的

平成 22-24 年度のアメリカでの科研研究結果から、子どもたちの映像記憶に文化の影響が見られることが明らかになったことから、日本で増加している「外国につながる子どもたち」でも同様に文化による映像記憶の影響が見られることが予想された。そこで本研究では以下の点を明らかにすることを目的とした。

(1) 日本で育つ「外国につながる子どもたち」にも映像記憶に文化の影響が見られるのかどうかを明らかにする
(2) 「外国につながる子どもたち」と彼らの母国の児童とでの比較研究から、子どもの育つ場によっても変化がみられるかを確認する
(3) 映像記憶に見られる文化の影響が発達段階によって変化することが示唆されたことから、追試を行い検証する

３．研究の方法

視聴調査の方法は、平成 22-24 年度の結果で導かれたアメリカでの研究結果と比較できるように、全て同じアニメ作品を使用して、日本、ブラジル、ペルーで視聴調査を計画・実施した。

視聴調査に使用した映像は，日本の(株)ハリケーンフィルムズ（現/株式会社サイプラス）が制作した『雪渡り』の日本語版(日本未公開)と英語&スペイン語版『Crossing the Snow』(Schlessinger Media)である。宮沢賢治の 『雪わたり』を原作とする本作品は、人間の子どもたちが不思議の森に住むキツネたちの主催する幻灯会に招待されて相互の信頼関係を築く内容で、作品はイギリスの放送局 S4C が主催した Animated Tales of the World シリーズの一つとして制作され海外の多くのテレビ局から放送された質の高い作品である。今回の調査対象とした「雪だるま」のシーンは、約 13 分の作品の中で主人公たちが森へ行き、キツネたちが作った「雪だるま」を見つける物語の鍵となるシーンである。

視聴調査は日本、ブラジル、ペルーの各校とも授業担当者が主導し、母語で筆者を紹介した上で日本のアニメを見せることを伝えた。視聴調査は１回目は各国児童・生徒にとっての異言語で上映し、視聴後に母語で書かれた質問紙に「今見た映像の中に出てきた雪だるまの絵を描いてください」と指示し回答を得た。

分析方法は、視聴後に質問紙に描かれた雪だるまの絵を分析の対象とした。子どもたちが描いた「雪だるま」の絵を「２玉」、「３玉」、「それ以外」に分類した。雪だるまに足がついているものや雪だるま以外のものが描かれている場合は「それ以外」とした。

図１．映像に現れる雪だるま@ｻｲﾌﾟﾗｽ

４．研究成果

本研究期間に視聴調査に協力を得たのは、東海地方にあるブラジル人学校Ｈ校と南米系外国人学校Ｍ校の 150 名、ブラジルのサンパウロ市内にある日系の学校のＯ校・Ｐ校・Ｃ校・Ｊ校の４校とペルーの首都リマにある日系のＶ校の合計 150 名である。これらの学校に加え、雪だるまを描くのがアメリカ文化特有の影響とも考えられたことから、英語で授業を実施しているペルー北部の都市トルヒーヨにあるインターナショナルスクール

のＦ校の 148 名、発達段階についてはカリフォルニアの小学校Ａ校で幼稚園から５年生までの 172 名の協力を得ると共に、Ｂ校と同じ学区にあるＰ高校で 125 名、さらに日本の関東地方にある公立小学校１年から６年の 211 名の協力を得た。

研究成果は現段階で下記の論文で報告をし、残りの調査結果については、現在、発表準備中である。

(1)「映像視聴に見られる文化の影響―ブラジル人学校での視聴調査と学習環境調査結果から―」

【概要】視聴調査の結果、ブラジル人学校Ｈ校の小学４年のクラス全員が２玉の雪だるまを描き、3 玉の雪だるまを描いた児童は 1 人もいなかった。彼らの生育・家庭・言語環境、メディア接触状況、将来について等、学習環境調査を実施すると共に、保護者にもインタビューを実施した。視聴調査では英語版と日本語版ではいずれも 50%以上の自己申告による理解度を示し、得意言語（ポルトガル語、日本語、英語）は出生地や通学した学校の種類だけではなく、親の使用言語やテレビやマンガなどメディアの影響なども影響していることが窺えた。彼らは両親の母国ブラジルの文化と育つ場である日本の文化、さらにはネットやメディアの文化の影響を吸収しながら育っていること等がわかった。また日系ブラジル人保護者については子どもの教育に関心が低い傾向があるとの先行研究が多いが、本校の保護者の教育への関心は高かった。

(2)「映像記憶に見られる文化の影響―発達段階による変化の検証―」

【概要】アメリカの私立小学校の視聴調査では、文化の影響を受けた３玉の雪だるまの絵を描いた４年生と５年生の割合に有意な偏りが確認されたことから、発達段階による変化が示唆された。そこで本研究では同じカリフォルニア州にある日英バイリンガルプログラム実施校で２度にわたって追試を行った。幼稚園から５年生までの子どもたちが雪だるまを２玉で描いたか３玉で描いたかをカイ二乗検定を行ったところ、一部で有意な偏りが見られたが、検証目的である発達段階による変化は確認できなかった。

(3)「子どもの描く「雪だるま」から見る文化の影響―在日ブラジル人学校とブラジル日系学校での視聴調査から」

【概要】２玉の雪だるまを描いたのは日本国内のブラジル人学校で 91.4%であったのに対し、ブラジルの日系学校在籍者では 69.6%と割合が低かった。また３玉の雪だるまを描いたのは日本のブラジル人学校では 4.6%にしか過ぎなかったが、ブラジルでは 13.6%と若干高くなっていた。日本のブラジル人学校の在籍者グループと、ブラジルの日系学校在籍者グループで、視聴後の雪だるまの描画に見られる２玉と３玉の雪だるまの出現率を調査するためにカイ二乗検定を行った結果、ブラジルでは３玉が、日本では２玉が５%水準で有意に多かった。

図２．Ｍ校生の描いた３玉の雪だるま

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

(1)塚本美恵子、映像視聴に見られる文化の影響―ブラジル人学校での視聴調査と学習環境調査結果から―、メディアと情報資源、査読無、21 巻 2 号、2015、1-14

(2) 塚本美恵子、映像記憶に見られる文化の影響―発達段階による変化の検証、メディアと情報資源、22 巻 1 号、査読無、2015、9-17

(3) 塚本美恵子、子どもの描く「雪だるま」から見る文化の影響―在日ブラジル人学校とブラジル日系学校での視聴調査から、メディアと情報資源、査読無、22 巻 2 号、2016、11-22

〔学会発表〕（計５件）

(1) 塚本美恵子 2013.7.6、子どもたちは何を見ているのか」日本教育メディア学会研究会、JAEMS2013 日本教育メディア学会研究会論集(pp31-34)

(2) 塚本美恵子 2014.6.8、ブラジル人学校の子どもたち映像をどう読み取っているか―「最も印象に残ったシーン」の分析から―、異文化間教育学会第 35 回大会発表抄録(pp164-165)

(3) 塚本美恵子 2015.5.16、子どもの映像視聴に見られる文化の影響―発達段階の検証―、日本教育工学会研究会、日本教育工学会研究報告書(JSET15-2 pp33-36)

(4) 塚本美恵子 2015.6.7 ブラジルの子どもたちは雪だるまをどう描いたか―ブラジルの日系小学校での視聴調査から―、異文化間教育学会第 36 回大会、第 35 回大会発表抄録(pp142-143)

(5) 塚本美恵子 2015.6.13 映像視聴に見られる文化の影響―南米につながる子どもた

ちと、本国の子どもたちへの視聴調査から
―、日本比較教育学会第 51 回大会　第 51
回大会発表要旨集録(pp71)

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
http://www.surugadai.ac.jp/prof/mtsukamo/

６．研究組織
(1)研究代表者
塚本 美恵子　（TSUKAMOTO Mieko）
駿河台大学・メディア情報学部・教授
研究者番号：10275927

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：